

新薬で変わる 最新のC型肝炎治療

放置しておくとも肝硬変や肝臓がんに進行するC型肝炎。その治療薬の開発が進み、患者の負担がより軽く、より高い効果が期待できる新薬が登場しています。C型肝炎治療の最新事情などを本県の肝疾患診療連携拠点病院の一つ、順天堂大医学部附属静岡病院消化器内科の玄田拓哉准教授に聞きました。

〈企画・制作／静岡新聞社営業局〉

沈黙の臓器で 自覚症状なし

「C型肝炎とはどのような病気でしょうか。」

肝炎は、肝臓に炎症を起こして、有害物質の解毒など肝臓の働きができなくなる病気です。ウイルス性肝炎は原因がウイルスで、患者数が日本人の約40人に1人とも推計される、国内最大の感染症です。このうち最も多いのがC型肝炎で、50代以上に多くみられます。ウイルスは感染者の血液を介して感染しますが、多くは感染源が不明です。

C型肝炎は慢性化しやすく、放置しておくとも肝硬変や肝臓がんになる可能性があります。肝臓がんの原因の約8割はC型肝炎です。しかし、肝臓は「沈黙の臓器」と言われるように感染しても自覚症状がなく、気付いたころには重症化している点が問題です。国もがん対策の観点からC型肝炎対策を重要な施策の一つと位置付け、早期発見・治療が最大の課題となっています。

効率よく より高い効果

「新薬が次々に登場しているようですが、治療の現状を教えてください。」

C型肝炎の治療は、ウイルスを体内から排除することですが、最新の治療薬は、早期発見さえできればウイルス排除で完治できるレベルまでできています。

これまで治療の主流は、注射薬のインターフェロンでした。しかし、血液中のウイルス量や遺伝子型によって効きやすさに違いがあり、長期の通院、重い副作用も負担となって、仕事や家庭との両立ができず治療を中断したり、諦めたりする患者さんもありました。最新のインターフェロンは、いわゆる「難治型」で

も90%近くウイルスを排除できるレベルまで進んでいますが、効果が全く得られないケースもあり、その場合は病気の進行を遅らせる治療法をとるしかありませんでした。

昨年から登場した新薬はインターフェロンに頼らず、服用するだけでより高い効果が期待される上、治療期間が短く、副作用も比較的軽いことから、患者さんの負担も大きく改善されました。

昨夏承認された「ダゲラタスビル」と「アスナプレビル」は、併用する飲み薬です。インターフェロンが効きにくかった、C型肝炎患者の約7割を占める遺伝子型「1型」が対象です。半年間の服用で80%以上の患者さんを完治させることができます。

さらに、今年5月には飲み薬「ソホスブビル」が出ました。C型肝炎患者の2割を占める「2型」が対象で、「リバビリン」との併用で臨床試験では約96%のウイルス除去の効果が確認されています。

そして、8月に登場した飲み薬「レジパスビル・ソホスブビル配合剤」は、「1型」向けにより効果を高めた薬です。臨床試験では患者さん全員から100%ウ

一生に一度 血液検査を

「今後の肝炎治療の課題は何でしょうか。」

新薬の開発により、早期発見できれば、今や「治せる」と言えるのがC型肝炎です。治療を諦めたり、二の足を踏んでいたりした患者さんに治療に踏み出すきっかけにしたい。また、いのと同時に、潜在患者を発掘することが重要な鍵になります。

肝疾患に関する相談・問い合わせ

順天堂大医学部附属静岡病院
「肝疾患相談支援センター」

住所：伊豆の国市長岡 1129

電話：055 (948) 5168

【受付10～16時、土日祝を除く】

ファクス：055 (948) 5182

イルスを排除したことが確認された大変優れた効果を発揮します。

今年発売された二つの新薬は服用期間も3カ月とかなり短縮されました。また、三つの新薬は初期の肝硬変にも効果が得られることが分かっています。

治療効果の高い新薬ですが、一部に持病などにより使えない患者さんがいたり、頻度は低いものの副作用があったりするため、新薬での治療が可能かは県内の肝臓専門医に相談してください。

新薬は非常に高額ですが、医療費助成の対象になっているので、助成制度についても県や保健所の窓口を確認してください。

肝炎は自覚症状がないため、感染しているかどうかは血液検査でなければ分かりません。現代では、検査は一生に一度でよいと考えられています。職場の健診や保健所の無料検診を利用して、ぜひ受けてください。そして、再検査が必要な場合、放置せずに肝臓専門医を必ず受診してください。

まずは、検査を受けて自分の感染の有無を知ること、それがC型肝炎対策の第一歩になります。



玄田 拓哉准教授